

### Ⅲ. 総合人間科第二年次高校の実践報告

高1.	山田	孝・仲田	恵子・持山	育英	央俊 <sup>※1</sup>
		柳田	嘉久・原	裕良	己行 <sup>※2</sup>
高2.	榎本直子	米田	一・田	中松	良恵
		長谷川	弘・平	口口	子子
		徳井輝	雄・滝	口口	子敏
高3.	斉藤真子	丸山合	豊治・福	谷藤	子久
		川合勇	治・加	島	容幸
		有田香代子 <sup>※3</sup>	・飯	島	幸
		佐藤俊樹	・飯	島	幸

## 1. 高校1年

### 生命と環境

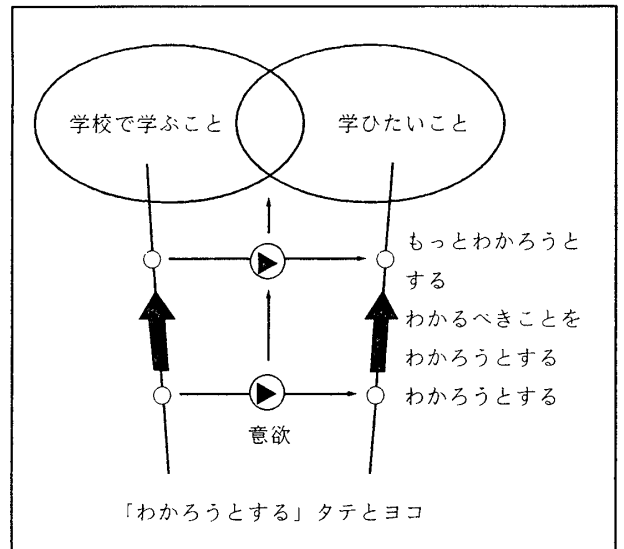
—地球を守るネットワーク—

山田 孝

#### Ⅰ. 学年テーマについて

学年テーマと研究主題「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発」との関連

身の回りの社会から、自ら学びたいテーマを見つけて学ぶことは、「学び方」を学ぶうえでも重要である。テーマを設定して、一つのテーマについて深く考えることは高校一年という感受性の強い、自己の内面を見つめる時期において非常に重要といえる。特に生命（いのち）や環境といった自分たちの生活にも密着している問題から考えることは、今後の高校で「なぜ勉強するのか」と言う生徒の疑問に答える上でも大切である。現在抱える問題を解決するためには、学校で学んだ内容も必ず役に立つはずであり、さらにその解決方法を学ぶ中から主体的に「学ぶ」方法を学ぶことができるはずである。また、身近な問題から考え、その解決方法を模索する中でもっと多くのことが「わかりたい」という欲求が生まれてくる。そして「わかりたい」という欲求に、総合人間科の授業が答えるならば、全面的な「わかるようとする」意欲を高めていくことができるのではないだろうか。高校生活の出発点として身近な問題から学び、この中から主体的に学ぶ意義がみつければ、研究主題である「自覚的に選択していく力」を育てることにつながってくるものと考えられる。



上図の説明

学びたい内容（自分が知るべきこと）を学ぶことにより、もっと学ぼうとする意欲が向上していく。  
 学びたいことを学ぶことにより、学校で学ぶこと（世の中で知るべきこと）に対する意欲も向上していく。

※1 静岡県立浜松西高校（1997.4より）

※2 愛知県立一宮興道高校（1997.4より）

※3 愛知県立守山高校（1997.4より）

## II. 学習方法と指導体制

### 1. 指導目標

学年の目標として、どのような力をどのレベルまで高めるのか。

目標

生徒の「学び」を育てる—「自己教育力」を高める

主体的に学ぶ姿勢を育てる—学ぶ楽しさを体験させる・討論会の実践

高校2年生での沖縄研究旅行でのフィールドワーク・グループワークに繋げる

生徒の総合人間科への授業づくりへの参加—主体的に授業に参加できる力をつける

最終的に獲得する力

- ・自らの研究テーマを設定できる力
- ・そのテーマについて調査研究ができる力
- ・研究内容をまとめることができる力
- ・研究テーマについて話し合え、自分の意見が

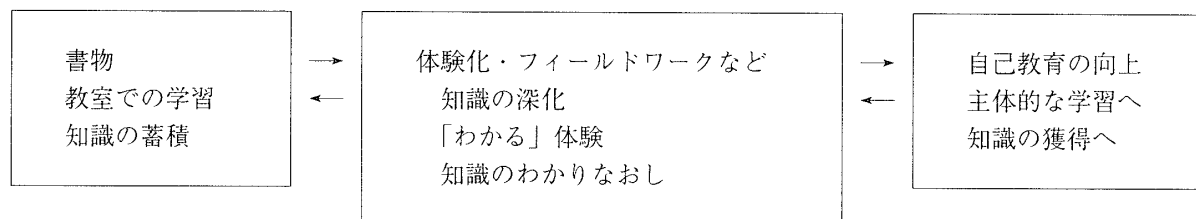
述べられるようになること。

- ・学んだ内容を実践できること。例えば、ボランティアなどで実際に社会とかわり合えることなど。
- ・総合人間科の授業だけでなく、他の教科についても主体的に学ぶ態度が養われること。

### 2. 学習方法

「わかる」ことを実感するために、生徒自身による主体的な学習活動を多様に展開する。一つには、個人研究テーマを設定して、大テーマ「生命と環境」に関連させて自ら学習・調査活動を実施させる。教師は、生徒に対して、共に学ぶ協力者として生徒の「学び」を援助する。さらに、調査・研究した内容を検証するためにフィールドワークを実施して、生徒の「学び」を体験により深めさせる。実際に学校行事としては、フィールドワーク（野外学習）を11月14日に実施した。それ以前に、夏休みなどに事前にボランティアに参加したり、積極的にフィールドワークに取り組んでいる生徒もいた。

知識の習得と体験による「わかる」ことの実感の構造



「わかる」の4つの条件

1. 具体的な問題が解決できること—問題解決
2. ものごとの根拠が示せること—根拠性
3. 現実の社会・文化とむすびつくこと—社会的実践性
4. 関連する世界が広がること—展望拡大性

### 3. 指導体制

こうした生徒の主体性を引き出す授業を行うために、クラスを解体し研究テーマによるグループを形成する。この研究グループで、研究活動を行っていく。さらに、研究グループに分けることにより学習の質を高めることをめざす。この研究グループは、指導教官制をとり、教師の設定した研究テーマに参加するというかたちをとる。

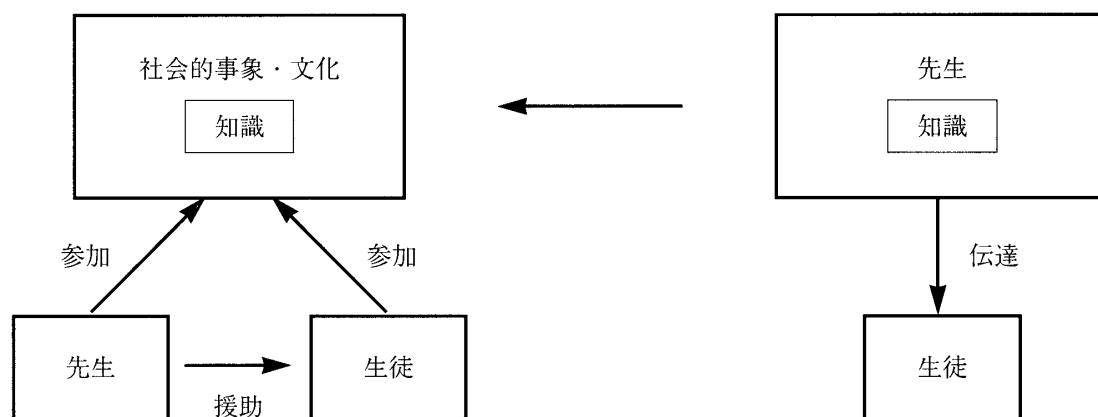
指導教官制—クラスをこえた研究グループの形成  
指導教官による研究グループに指導—教官のテ

マ(分野)を中心に  
はじめに研究テーマについてのアドバイスを  
行う(林間学校での特別講義にて)

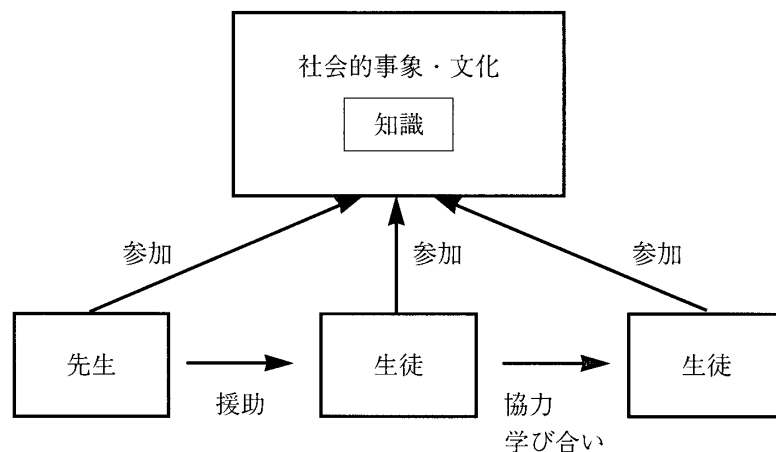
→指導教官自身も自らのテーマを深める  
生徒が主体的に取り組める学習活動の形成

・下の図右の教師からの知識の伝達という直線的な関係から下の図左の三角形の関係に学びの関係を改善する。

・総合人間科では、生徒の主体的な力を育てるために、下の図中央のような関係を目指す。



この関係から生徒自身による学び合いの関係に発展させる



参考文献 『「わかる」ということの意味—学ぶ意欲の発見』 佐伯 胖著 岩波書店

### Ⅲ. 第1年から第2年次へむけて

#### 1. 前年度との比較検討

多様な「学び」の要求に応える

昨年度の実践と同様に大テーマを「生命と環境」として、このテーマの中から個人研究テーマを設定することになった。今年度では、昨年度の成果の上に、さらに個人研究テーマの枠をもっと広めて、直接的な生命や環境問題を扱うグループから、心理的・倫理的問題や国際理解、ボランティアを扱うグループまで認めることになった。これは、高校一年の段階では、多様な問題意識・関心を認め、個人個人が自主的に自分の設定した問題に意欲的に取り組められるように配慮した結果である。まず、自分の研究テーマを定めて、それに向かって調査研究していくための姿勢を作るのが目的である。このためには、昨年度と同様クラスを解体して、研究テーマの近いグループを形成して、個人研究の支援を行った。これは、4月当初の本校の研究会議でも論議され、高校一年では、多様な研究テーマを認め、学ぶ最初の姿勢を確立することに重点を置くことが確認されたからである。まず、ひとり一人が「学ぶ」方法を学び、高校二年生でのグループワーク・共同研究へと発展させていくものである。

昨年度よりも個人研究テーマの枠を広げ、取り組んでいくのだが、大テーマ「生命と環境」との関係で言えば、フィールドワーク実施以後の取り組みとして個人の研究テーマを大テーマへの収束していく活動を実施することになる。個々バラバラにみえる個人研究テーマについても、実際のところ何らかの点で大テーマに関連しているのである。それを、今年度新しくパネルディスカッションを実施することにより、大テーマに立ち返らせるわけである。高校一年生が、それぞれ学んできた内容をこれからどう実践に移すかという点で、「生命と環境」の問題にダイレクトに結びつくことになる。ひとり一人が学んだ内容を、「地球を守る」という観点から結びつけていこうとするものである。私たちの住む地球を守るために何ができるのか、考えようと言うのがフィールドワーク以後の活動の中心になってくる。各学年が、総合人間科の授業で学んだ内容をどの様に実践に移すのかを課題としているのだが、高校一年では、「地球を守る」という行動を自分ではどの様に実践できるのか模索することにより、主体的に「地球を守る」営みに参加できる道を追及していくことである。その第一歩がパネルディスカッションである。

#### 2. 継続と発展、新しい試み

##### (1) パネルディスカッションの取り組み

パネルディスカッションは数名の異なる立場のパネリスト（発表者）が代表で問題提起をして、それに対してフロアー（聴衆）とディスカッションをして議論を深めて、課題を明らかにするものである。パネリストはこれまでの調査活動で新聞、雑誌、書籍などからと、野外活動で収集した資料をもとに発表する。

公開授業の流れでは、前半の3分間で、研究テーマの現状分析と問題点の提示を行う。後半の3分間で、課題解決の方法や提案を述べる。

資料はB紙などに大きく書いたり（出典を明らかにする）地図や写真を提示装置で映して、主張を裏付ける資料を提示しながら、筋道を立て、わかりやすく、報告する。限られた時間で行うので、時間を上手く使い、与えられた時間を守ることが重要である。他のパネリストの報告もよく聞いて、後で関連したことなどが話せるようにディスカッションの間も準備する。フロアーからの質疑に答えたり、ディスカッションの際には相手の話をよく聞く。

一方、フロアーは、ただ発表を聞いてなるほどと思うだけではない。ディスカッションの際には主役になるのである。客観的な判断力を持って、質疑応答や討論の際には、発表者の現状分析でいいのか、課題解決の提案はそれで十分なのかを考えて発言する。発言することで、討論に参加して課題をどのように主体的に解決するのかを考える。

今回のパネルディスカッションでは、野外学習の成果を発表し、発表者以外の生徒がただ聞くという形式から、パネリストの提案から自分の研究と照らし合わせて討論することを目的とした。

こうした討論をベースとした活動は、林間学校でクラス別討論会を実施しており、生徒の中にもある程度のイメージはできあがっている。また、林間学校で実施したクラス別討論会は、クラスで自由に討論ができる雰囲気を作り出すものであったが、このパネルディスカッションに結びついてきている。

また、このパネルディスカッションは、生徒自身によるコーディネーター（司会）、書記・タイムキーパー・企画委員により運営される。この授業自体も生徒の主体的な運営を前提として行われる。生徒自身が、予定されている個人研究発表者からパネリストを選んで、当日のパネルディスカッションの授業自身を構成している。

## (2) サブテーマ「地球を守るネットワーク」の設定

フィールドワーク以後の取り組みは、主体的に「生命と環境」という大テーマにどうアプローチしていくかということだったが、サブテーマ「地球を守るネットワーク」を設定して、ネットワークづくりによどの様に主体的に関わっていくのか、自らの人生を選択する前提となる学習を行うことになった。当初の目的でもあった、社会的実践性—現実の社会・文化とむすびつくこと、展望拡大性—関連する世界が広がることをこのサブテーマで追究する。我々の営み自身が「地球を守る」行為に結びつくように。また、全ての行為が何かしら「地球を守る」行為に関係しているのであることを理解できるようにする。たとえば、「教育」や「福祉」の問題、「心理学」や「倫理」の問題からも「地球を守るネットワーク」に参加できることに気づかせるのが目的である。

## (3) パネルディスカッションの手応え

A組～C組の三クラスで、パネルディスカッションを実施したが、クラスによって討論に差ができたようである。B組はパネリストのテーマを絞って国際理解を中心に行ったので、討論がかみ合って活発な話し合いができたようである。他のクラスでは、意図的にテーマを分散させて議論を活発に巻き起こそうとしたのだが、かえって話し合いになりにくかったようであった。どちらにしても、従来の報告だけの発表会から、討論を中心とした発表会への試みとして成功したのではないだろうか。パネルディスカッション実施後のアンケートをみても、「友達の発表を聞くこと」については、「やりたくない」より「やりたい」が上回っていた。また、「友達の発表を聞くこと」は必要であると答えている。今後は、事前に意義をしっかりと確認して、発表の組み合わせを検討すれば活発な議論ができるであろうと考えられる。

## (4) 個人研究発表会の実施

個人研究発表会により、「学び合い」が広がっている。第2回の個人研究発表会・ディスカッションでは、個人研究の報告書も出来上がり、発表内容自体も一年近く研究してきた内容をまとめて発表している。11月のパネルディスカッションでは、野外学習の直後と言うこともあって、研究内容のまとめは不足していたように思われるが、第二回目からはよくまとめられている。それにともなって、理解の広がりも見られる。

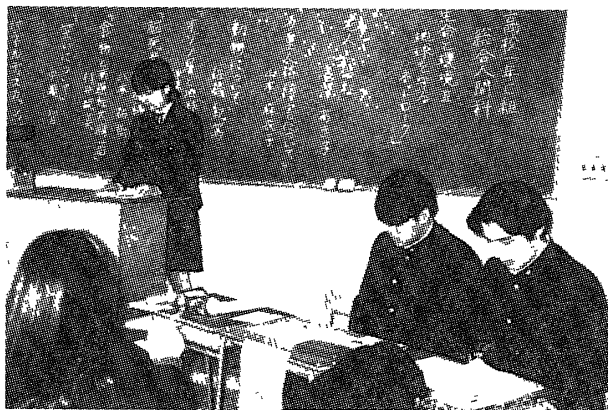
次に、個人研究発表会の感想を紹介するが、生徒の発表の中から「生命と環境」についての理解が広がっているようすがわかる。また、ディスカッションとい

う形では、意見を言うことができない生徒も感想文という形で、積極的に意見を述べることもできるようになった。こうした意見の存在もフィールドバックして「学び合い」の意識を高めていくことも必要である。以下に、代表的な感想を紹介しておく。

- ・ 自分の意見や感想も含めて発表してもらいたかったと思った。聞いているだけだと少し退屈してしまうので、多少の工夫が必要かと思った。
- ・ 話はみんな良くできていたと思う。でも装置を使ったりして工夫すると良かったと思う。身近な問題を選んだところはいいと思った。
- ・ みんな良く調べてあって良かった。自分も分かりやすい発表ができれば良いと思う。
- ・ 自分としてはまあまあだと思う。しかし、もっと自分の意見を言うておけばと少し後悔している。
- ・ 緊張した。もう少し研究した内容をまとめられると良かったと思う。
- ・ 資料を写している人がいたりして、手がこんで、がんばっているなあ、えらいなあと思った。みんな良くできていると思った。
- ・ みんなしっかり調べてあって、感心しました。環境問題の話聞いて、本当に大変なんだなあ、あらためて実感しました。文化を高めながら、環境も良くしていけたら最高だと思いました。
- ・ 環境問題については、そんなに深刻な問題になっているとは思わなかったのでおどろいた。
- ・ とても楽しかったです。もっと個人の意見や考えを聞きたかったので、説明だけの人の発表では少し残念でした。また次にみんなの発表を聞くのが楽しみです。
- ・ 今日の発表は、環境問題についての話が良かったです。酸性雨は、私が環境問題の中では最も興味があったことなので知識が深まって良かったです。
- ・ みんなが発表することで、自分も少しわかったことなどがあってよかったです。資料を使っている人もいて良かったです。
- ・ 人前で発表するのは大変なことだと思いました。自分がやる時はちゃんとまとめて、そして分かりやすく退屈しない発表を心がけたいと思います。
- ・ テレビを使ったらわかりやすくなるんだなと思った。環境の問題など今まで知らなかったことを知ることができてよかったです。
- ・ テーマ別に発表すると、理解が深まり良いと思いました。OHPをわざわざ用意してくれたのに

使わない人が多くて残念でした。みんなそれぞれ自分のテーマについて良く考えているなあと思いました。

- ・ いい勉強になっていろいろわからない問題が出来て是非、自分もそういう研究をするチャンスがあるといいと思います。



#### IV. 指導の経過

- 第1回 4月20日  
授業参観・保護者会—図書館にて  
総合人間科のガイダンス  
昨年度の取り組みの紹介
- 第2回 5月18日  
林間学校での学級討論会の準備  
クラス討論テーマの決定  
林間学校の生活班分け  
係り別会合
- 第3回 5月28日～30日  
林間学校にて  
クラス別討論会  
指導教官特別講義  
—教官の研究テーマを発表
- 第4回 6月1日  
林間学校の反省  
研究テーマについての希望調査
- 第5回 6月15日  
第1回指導教官別ディスカッション  
6月1日に行った個人研究テーマ調査をもとに指導教官を決め、研究テーマの傾向によってグループ分けを行った。この教官別ディスカッションでは、一人一人が個人的に研究を進めていくだけでなくグループ内で情報を交換し、仲間と討論することにより内容を深めていくことを目的として実施した。総合人間科の授業の目的の一つは、“学びあう”学習であり、互いに刺激を与えあってアイデアを出し合って、共同研究も交えながら個人研究テーマを追究していくことを基本とした。また、

研究テーマが異なっても研究の方法は共通しているので、まわりの仲間の活動から「学び方」を学んでいくことも大切なことである。

#### 指導教官テーマ

- 山田グループ 「教育・福祉」
- 仲田グループ 「国際理解・ボランティア」
- 持山グループ 「心理学」
- 柳田グループ 「ハイテク公害」
- 米田グループ 「食品問題」
- 原グループ 「環境問題」
- 田中グループ 「生命・倫理問題」

- 第6回 6月29日  
第2回指導教官別ディスカッション  
研究グループ別  
前回のディスカッションで考えたこととの交流  
自分のテーマの実現の可能性の検討
- 第7回 7月6日  
個人研究テーマ発表会と一学期のまとめ  
各教室にて、個人研究テーマについての発表会を実施。発表内容は、研究のテーマ・研究の動機・研究の目的・現在の進行状況、フィールドワークの候補地など。発表内容、発表の方法について、自己評価・相互評価を行う。  
クラスの仲間の発表をABCの三つのランクに評価し、自分の発表についてもABCの三つのランクで自己評価を行った。
- 第8回 9月7日  
全体オリエンテーション  
(3限目—図書館にて)  
二学期の予定の確認、フィールドワークについての諸注意  
総合人間科の評価について  
自己評価は「できたこと」・「努力したこと」を自分自身で最大限評価することを再確認。  
各研究グループでの検討会(4限目)  
夏休みの取り組みについての報告会  
訪問先についての検討・決定
- 第9回 9月21日  
研究グループ別授業①  
指導教官と協力して研究テーマについて検討を深める  
訪問先の決定  
11月28日フィールドワーク実施報告会の報告者の決定
- 第10回 10月5日  
研究グループ別授業②

- 指導教官による個別指導  
研究テーマの確定  
訪問先の決定
- 第11回 11月2日  
研究グループ別授業③  
指導教官による個別指導  
訪問先の住所・担当者等の確認  
報告用紙への記入  
訪問先への質問状の作成  
質問内容をまとめる  
教育学部心理学科岡田先生との共同研究  
岡田ゼミの学生と心理学をテーマにして  
いる高校生との交流を実施  
11月15日 フィールドワーク実施
- 第12回 11月16日  
各ホームルーム教室にて  
お礼状の作成  
フィールドワークの実施報告書の記入  
11月28日のパネルディスカッション（発表会）の準備
- 第13回 11月28日  
第一回 個人研究発表会・パネルディスカッションを実施
- 第14回 12月7日  
個人研究報告書づくり
- 第15回 2月1日  
個人研究報告書の推敲・完成  
個人研究発表の準備
- 第16回 2月6日  
第二回 個人研究発表会・ディスカッション  
ホームルームの時間を借りて発表会を実施
- 第17回 2月15日  
第三回 個人研究発表会・ディスカッション

## V. 生徒の取り組みと変容

これまでの総合人間科の授業について、生徒の取り組みと変化を生徒をいくつかのタイプにわけて紹介する。総合人間科の授業についての質問項目は、a授業に取り組んで自分がどのように変化したか、bフィールドワークに取り組んだ感想である。

### (1) 教科の授業も総合人間科の授業も積極的に取り組むタイプ

Aさん

- a 私たちは人と人との本当の会話ができていないと言うことに気づいた。ただ口でしゃべるといのは、情報伝達ではよいのだが、会話とし

ては成り立たない。口だけで棒立ちで言葉を話すと、その中には感情、心はこもっていないのだということに気づいた。人間は本来体が感情のままに動き、言葉はそれにつきそうものであることがわかった。私は世界の陰となっていた一番大切な、言葉が話せる人にはとうてい気づかない世界をみつけることができた。

- b 感動感動の連続です。一冊の本に、自分が全く考えてもみなかったことばかり書いてあり、これがきっかけとなって色々なことを考えさせられました。常識と思っていたものを崩して考えないととうてい理解のできないことでした。竹内先生に会い、お話を聞き、耳の聞こえる人にとっては難しいことだということもまた考えさせられました。私は、耳が生まれつき聞こえるけれど、言語障害の子どもたちについてももっともっと表面的でなく、内面的に考えていきたいです。少しずつでも本当の“からだことば”の関係をみいだしていければよいと思います。

Bくん

- a 今までは環境に対して傍観者のつもりだったが、これからは自分から進んで問題に取り組んでいかなくてはならないと感じた。
- b 正直なところ事前の用意が完全にできていたわけではなく、前夜に質問事項等の確認を行ったのですが、訪問先での話しを聞きもっと事前準備をする必要があったのではなかったかと反省しました。来年の沖縄へはそのようなことがないようにしたいです。訪問先ではあらかじめ送っておいた質問をもとに懇切丁寧な返答をしていただきありがたく思いました。環境への取り組みの意欲がはっきり変わったことが、今回のフィールドワークで得た一番のことではないかと思いました。

### (2) 教科の授業も総合人間科の授業に対してあまり積極的でないタイプ

Cくん

- a 人間と一本の線をひいて、その下に動物をおくのではなく人間も動物だということがすごく重くわかった。
- b 熱意をもってなにかをやれば、それがたとえ未完の物でも自分には誇れる。

Dさん

- a O—157についての知識が前よりたくさん身についた。
- b 今まで知らなかったことなどがフィールドワークにいったおかげでたくさん分かってよかった。

(3) 総合人間科の授業に積極的に取り組むタイプ

Eさん

a 私は「らい病」についてだけに目を向けていたけれど、「らい」にかかった人々の気持ちをもっと知りたいと思った。「らい」にかかわらず、「病気にかかる」ことについて考えるようになった。世界では薬が足らず困っている人々がいるので私も何かしてあげたいと思った。

b 午前への訪問先は自分が知りたいことをすべて教えてくれたような感じでした。午後は「ハンセン病」を医学の面から見ることを教えてくださいました。私はあまり調べようがなく無知識で出掛け、思ったほど質問をすることができませんでした。質問してもあまり自身がなくて小言のように言ってしまったような気がしました。でも質問をする前に答をすべて教えてくれたようでした。

私の調べたいことはすべて愛知県にはなく、東京や沖縄等の遠いところばかりでした。だからちょっと無理のあるテーマかと思ったけれど資料などを送ってもらうように伝えたいと思っています。

Fさん

a 障害者を初めは怖い、とかそういう目で正直言って見ていたところがあったけれど、実際に接してみるとちょっと言葉が伝わらなかつたり、足りなかつたり感情の赴くままストレートに行動したり、逆にちょっと不器用だつたりするだけで私たちと変わらない。この世に生まれてきた同じ人間だということがわかって、恐いなんて思わなくなったし、一人の人間として見るようになりました。

b 障害を持った子が生まれる確立は1パーセント、100人に1人だそうです。そのことを「障害を持った子は99人分の障害を背負っているのよ。」と聞いた時、とても胸が苦しくなりました。私がこうやって元気で生まれてこれたのも、誰かが私の障害を背負っているからなんだと思うと、辛かったです。そういう考えが「広まれば」差別や偏見も少しずつなくなってくるのではないかと思います。どうしたら、そういう考えや正しい理解がもっとみんなに伝わるか（どうやって伝えるか）ということも大きな問題だと思いました。

(4) 総合人間科の授業は苦手なタイプ

Gくん

a フィールドワーク前より研究が進んで、知識も少し増えた気がする。

b とても研究の参考になり、ためになった。フィールドワークをしてよかった。

Hさん

a 食生活を意識し始めた点

b 貴重な体験をしたと思う。役に立った。

教科の授業も総合人間科の授業も積極的に取り組むタイプでは、やはり総合人間科の授業が「学び」の励みになっている。フィールドワーク自体にも感動しており、次の研究へと取り組みを継続させる姿勢が見られる。この点では、総合人間科を特に積極的に取り組むタイプでも同じように、研究に対する意欲が向上している。

これに対して、教科の授業にも総合人間科の授業にも積極的ではないタイプではある程度の知識の拡大にとどまっている。このタイプでは、研究テーマの設定の段階から学習の目的が見いだされず、研究テーマ自体も深められてこなかったように思われる。この点では、総合人間科のような主体的な活動を要求される学習形態を苦手とするタイプでも、なかなか研究テーマを決められず苦勞したようである。このタイプは、通常の教科の授業の様にどちらかという受け身となる授業が慣れているようである。

VI. 評価について

先にも述べた「総合人間科で身につけさせたい力」を、評価を考える上で更に具体化した。

総合人間科で身につけさせたい（伸ばしたい）力

- 自らの研究テーマを設定できる力
- 自らの研究テーマについて調査研究ができる力
- 研究内容をまとめる力
- 研究テーマについて話し合える力
- 自分の意見を述べる力
- 学んだ内容を実践する力
- 既存の教科を主体的に学ぶ力（総合人間科での学ぶ姿勢が、他教科で表れるかどうか）
- ※ 自分自身を評価できる力
- （※ 他人を客観的に評価できる力）

上に掲げたそれぞれの力を基盤に、高校1年生での課題に併せて、【観点項目】とそれぞれの下位項目（a～b（e））を考えた。全体の評価の観点を、I～IVで示す。

観点項目と下位項目

I. 知的関心の形成と問題解決能力

- ①【テーマを設定する力】



- a 自分の興味関心を大切にテーマを決めたか
- b 資料を集めたり、人に話を聞いたりして、テーマを十分に考えることができたか
- c 目標や見通しを持つことができたか
- d 自分のテーマは、1年間追求し続けるに値するテーマか

②【テーマを追求する力】

- a (意欲的に多くの本に目を通すなど) 事前学習を意欲的に行うことができたか
- b 自分が行った追求活動の記録を、詳細に残すことができたか
- c 訪問場所を、自主的に探すことができたか
- d 野外学習の計画・依頼・実施などを、自ら積極的にできたか
- e 資料や施設、まわりの人々からの情報を幅広く活用することができたか

II. 体験・コミュニケーション能力

③【討論する力】

- a グループの中で、自分の意見をはっきりと言うことができたか
- b 発表の中で、根拠を示し、必要に応じて具体例を挙げることができたか
- c 他者の発表に対して、質問や意見を言うことができたか
- d 他者のアドバイスを自分に受け入れて、自分の考えを膨らますことができたか

III. 創造的表現能力

④【研究内容をまとめる(表現する)力】

- a 研究内容を、わかりやすく発表することができたか(研究発表会)
- b 図表や写真などを効果的に使うことができたか(研究発表会)

- c 研究内容を、適切に、原稿にまとめることができたか(研究集録)
- d 自分らしく工夫した発表や集録原稿ができたか

IV. 総合的思考力と実践能力

⑤【実践する力】

- a テーマ追求を通して、自分の中で何か意識(価値観)が変化したか
- b テーマを通して考えたことを、自分の生活の中で応用して行動すること(社会的な)
- c 総合人間科を通して、自分や自分の生活の中で反省する点を発見し、向上心を持つことができたか
- d 自分で理解したことを、友人や家族など周りの人に伝えたか

⑥【(自分を)評価する力】

- a (1年間を通して)総合人間科の学習に主体的に取り組めたか
- b 自分のテーマについての知識や理解が深まったか
- c 自分自身の個人的な感情や友人関係に左右されずに、他者の発表や発言を正当に評価することができたか
- d 他の人に、適切なアドバイスをすることができたか

評価する方法は【自己評価】【生徒の総合評価】【指導者の評価】の3つを考えている。評価の方法(自己/相互/指導者)や観点は、学習内容(1年間のそれぞれの段階)によって異なるのではないか。学習内容と評価との関連を次の表のように考えてみた。

評価の観点/学習内容		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
①	テーマを設定する力		○		○									
②	テーマを追求する力					○		○	○	○				
③	研究内容をまとめる力					○	○					○	○	
④	討論する力	○	○			○	○					○		
⑤	学んだことを実践する力							○						○
⑥	自分を評価する力						○				○	○	○	
評価方法	● 自己評価	●		●	●	●	●	●	●		●	●	●	●
	▲ 相互評価	▲				▲	▲					▲	▲	
	■ 指導者の評価	■	■		■	■	■	■	■	■		■	■	

〈学習内容〉

【1学期】

- A ; クラス討論会 (林間学校)
- B ; 林間学校での特別講義
- C ; 林間学校全体を通して (林間学校の反省／アンケート)
- D ; 研究テーマの設定 (テーマ設定に至るまでの学習)
- E ; 研究グループでの「個人テーマ発表会」
- F ; クラスでの「個人テーマ発表会」

【夏休み】

- G ; 夏休みの取り組み (ボランティア活動・読書など)

【2学期】

- H ; 調査研究などの活動 (主に2学期全般)
- I ; 野外学習の企画・立案・訪問依頼など
- J ; 野外学習の実施

【3学期】

- K ; 研究発表会
- L ; 研究集録
- M ; 1年間の反省

## Ⅶ. 今後の課題

### 1. 主体的学習確立の課題

総合人間科の授業に関して意識の高い生徒は、積極的に自分でテーマを設定でき、訪問場所も自分で探して決定することができた。一方、総合人間科の授業に関して問題意識の低い生徒は、研究テーマ設定の段階から、自分の関心が見つけられずいぶん苦勞していた。ここに意識の低い生徒 (自学自習という取り組みの苦手な生徒) と関心の高い生徒 (附属のフィールドワークに慣れている生徒) との差ができてしまった。この傾向は、やはり附属内部からの生徒の方が、それなりに自分で研究方針を定められるようである。

今後の課題としては、いかに問題意識の低い、自分から研究テーマを定めることが困難な生徒に主体的に取り組められるように指導するかである。

それは、何を「学ぶか」という内容から考える必要があるのではないだろうか。与えられた学習には、それなりに反応するが、主体的に「学ぶ」内容を自分で定める方法には消極的になってしまう現状を打開しなくてはならない。ここに総合人間科の授業の意義があるのではないだろうか。

### 2. 研究成果をまとめ、発表する力を伸ばす

11月14日フィールドワークを実施し、現在は研究内容をまとめる作業に入っている。フィールドワークなどでさらに疑問に感じたことなどをもう一度研究している生徒もいる。また、フィールドワーク実施日に都合のつかなかった訪問先にもう一度問い合わせさせてさらに研究を重ねようとしている生徒も見受けられる。このように今も継続して研究している生徒がいるのだが、一応のまとめの時期に入ってきた。今後は、報告書をまとめながら研究成果の発表会を行い、学んだ内容の共有化をはかる。この場合、今回実践してみたパネルディスカッション形式が、聴く側にとって発表会に主体的に関われる方法なのか検討してみる余地がある。

### 3. 評価をめぐる問題

今年度で総合人間科の授業も2年目を迎える。手探りで授業を行ってきたが、総合人間科としてどの様に評価をするのか検討を進めていく必要がある。昨年度より評価については、自己評価、相互評価、指導教官の評価の三つの観点から行われてきたが、今年度もこの評価の方式を踏襲することになった。また、新たな評価項目として何点か検討されてきているが、今年度の新しい評価の観点から評価することができるのか、今後とも総合人間科の授業内容にも検討を加える必要があるだろう。

## VIII資料—研究テーマと訪問先—一覧表

テーマ	午前訪問先	午後訪問先
アジア	アジア保健研修センター (AHI) 日進市米野木南山	国際協力事業団 名古屋研修センター (JAICA) 名東区亀の井2-73
青年海外協力隊について	同上	同上
差別	同上	カスパル名古屋 (CASPAR) アジアの児童売春阻止を訴える会
純粹になりたい—映画から考える	カウンセラー	映画館
マンマシン・インターフェイス	コンピューター会社 サン電子	ライトスタッフ 昭和区吹上町2-8
コンピュータゲームの発達	同上	同上
HIV感染者を支えるボランティア	サフラン生活園	
知的障害者との共生	サマリアハウス 社会福祉法人 AJU自立の家	愛知県立名古屋養護学校 西区中小田 井5-88
知的障害者について	同上	同上
アレルギーについて	スギヤマ薬局御器所店 昭和区阿由知通4-7	うどん三善屋
スポーツの心理	スポーツ情報センター	名大総合保健体育科学センター 矢部先生
近視について	メガネの和光星が丘店	星ヶ丘視力回復訓練センター 千種区 田代
火事場のバカ力	愛工大	名大総合保健体育科学センター 矢部先生
学校の必要性	同上	同上
森と人	愛知県森林組合連合会 中区三の丸3-5-16	名大農学部森林学科
おいしい水の成分	愛知県庁上水課 中区三の丸3-1-2	下水道科学館 北区名城1-3-3
老人看護について	医療技術短期大学看護学科	
保育問題について	栄幼稚園 中区栄1-28-1	名古屋保育専門学校 昭和区永金
幼児教育	同上	カスパル名古屋 (CASPAR) アジアの児童売春阻止を訴える会
保育について	同上	名古屋保育専門学校 〒466 昭和区永金 町1-1-15
生死について	岩倉市役所 岩倉市栄町	岩倉保健センター 岩倉市旭町
モラトリアム	教育学部 吉田先生	名大医学部 本城先生
人の目	同上	教育センター教育相談室
思春期の心理	同上	同上
現代の環境と年齢の違いによる心理	同上	同上
14才の少年の心理	同上	同上
優しい気持ち	同上	精神薄弱施設あけぼの学園

1. 高校1年 生命と環境 —地球を守るネットワーク—

テーマ	午前訪問先	午後訪問先
青年期の心理	教育学部 金井先生	
心身の発達と家庭環境	同上	家庭裁判所 中区三の丸1-7-1
現在の保育	同上	河合塾ドルトンスクール 千種区今池2-201
教育～子ども？	同上	家庭裁判所 中区三の丸1-7-1
心理学人間の心	同上	名大医学部精神科 本城先生
犯罪心理学	教育学部 吉田先生	家庭裁判所 中区三の丸1-7-1
心理学について	教育心理学研究室 星野先生	安田荘 昭和区安田通2-4-2
「らい」について	県衛生部保健予防課 中区丸ノ内	名大総合保健体育センター保健科学部 大澤先生
環境からの障害	県庁環境部大気保全課	名古屋大学工学部地圏環境工学環境シ ステム
地球の環境気象問題	同上	同上
これまでと、これからの異 常気象環境問題	同上	同上
地球温暖化	同上	同上
大気汚染をくいとめること は可能か	同上	同上
オゾンと気象の関係	同上	同上
環境破壊と人間	同上	同上
オゾン層と地球～人類補完 計画～	同上	同上
オゾン層の破壊について	同上	同上
エネルギーと環境	同上	中部通産局資源エネルギー対策課 中区三の丸合同庁舎2号館
地球環境について	同上	下水道科学館 北区名城1-3-3
地球の持続は可能か	同上	市役所環境保全局 中区三の丸3-3-1
父について	工学部	本校図書館
福祉	港協立総合病院 熱田区六番3	名古屋中央看護専門学校 東区葵1- 4-7
福祉～看護婦の私生活	同上	同上
看護について	同上	名古屋市社会福祉協議会内なごやかハ ルプ研修センター&ボランティアセン ター 昭和区阿由知3-19
老人問題	同上	同上
アジアの食事	国際センター 中村区那古野1-47- 1	国際協力事業団 中区丸ノ内2-4- 7 愛知県産業貿易館西館8階
各地の食事	同上	同上
骨髄移植	骨髄移植を支援する会 中区正木3- 13山田ビル702	名大総合保健体育センター保健科学部 大澤先生
私はおなかに住んでいる	坂井病院 緑区六田1-214	菅原家 緑区神沢1-3306
水	山崎川下水・汚泥処理工場 南区豊田町	山崎川の水質検査 本校化学教室にて
水について～川～	同上	同上
環境について考える	同上	名古屋環境学習センター 中区栄1-2 3-13 伏見ライフプラザ13階
児童心理-小さい子と上手に つきあっていくには？	市立軍水保育園 瑞穂区軍水町1-5 4-2	軍水保育園の保母さんから話を聞く

テーマ	午前訪問先	午後訪問先
爆発物	自衛隊守山駐屯部隊広報部 守山区3-12-1	
子どものための幼児施設	汁谷保育園 千種区汁谷39	よもぎ幼稚園 名東区よもぎ台
夢	小学校	名大医学部 本城先生
心理テストの歴史	図書館	教育学部 川上先生
心理テストの裏側	図書館	同上
笑いについて	図書館	教育学部 杉村先生
食物について	千種保健所	
食物が人体に与える影響	同上	生協文化会館 千種区稲船通り1-39
食品添加物について	同上	同上
食中毒について	同上	三善屋 昭和区円上町29-20
食中毒について	同上	同上
食物が人体に与える影響	同上	同上
食物	同上	
拒食症とダイエット	同上	名大医学部 本城先生
ダイエット食品と栄養	同上	スギヤマ薬局 栄店
子どものからだことば	千種聾学校 千種区若水2-5-1	竹内敏晴 南山短大
障害者の教育について	千種聾学校	
現代における幼児教育の必要性	中川幼稚園 海部郡七宝町伊福隅田56	
未来エネルギー	中部電力技術開発本部研究企画部 緑区大高町字北関20-1	午後も
精神病について	鶴舞図書館	名大医学部 本城先生
多重人格障害について	同上	同上
麻薬	東海北陸地区麻薬取締官事務所合同庁舎2号館	県薬務課 中区三の丸3-1-25
いじめ問題	東山小学校 上村先生 千種区橋本町3-20	愛教大 折出研究室 刈谷市井ヶ谷町広沢1
障害者とのコミュニケーション	特別養護老人センター厚生院 名古屋市名東区勢子坊2-1501	
老人と福祉	同上	
イルカと人間	南知多ビーチランド	
イルカについて	二見シーパラダイス 三重県度会郡二見町	
昔から今への遊具がどのように変化したか	任天堂(株)名古屋営業所 西区幅下2-18-9	ゲームセンター調査
農業	農家八木さんのお宅を訪問 海部郡弥富町	
食文化の移り変わり	名古屋港水族館	東山動物園
人間の食文化	同上	同上
動物の住みやすい環境	同上	同上
アカウミガメの種の保存	同上	
犯罪者・自殺する人の心理	名古屋少年鑑別所 千種区北千種1-6-8	家庭裁判所 中区三の丸1-7-1
犯罪を犯す心	同上	同上

1. 高校1年 生命と環境 —地球を守るネットワーク—

テーマ	午前訪問先	午後訪問先
宗教	名古屋東別院 中区橋2-8-55	みこころセンター 中区丸の内3-6-43
宗教と死	同上	同上
心理学	同上	同上
点字…視覚障害者	名古屋盲学校 千種区1-8-22	名古屋盲人情報文化センター 港区港陽1-1-65
生死について	名大 安川教授	午後は資料整理
原子力発電と放射性廃棄物	名大アイソトープ総合センター	名大原子核工学科
No More Guns	名大の学生さん 11:00~	服部美恵子さん宅 港区福屋1-95
携帯電話による影響	名大医学部生理学科 鶴舞附属病院	中部電力 中支社 中区中部電力中支店
電波の人体への影響	同上	同上
電磁波の危険性	同上	同上
マイクロ波の人体への影響	同上	同上
心理学	名大総合保健体育科学センター	グランパスエイト 豊田市保見町井向57-230 トヨタスポーツセンター
病院システム	名大病院第一内科医局	
盲導犬について	盲導犬総合訓練センター 港区十一屋1-70-4	名古屋盲人情報文化センター 港区港陽1-1-65
東洋医学と病	浴場業環境衛生同業組合 中区	
外国人の心	留学生会館	留学生会館
人間の健康		陶生病院 瀬戸市西追分160
脳死による臓器移植について		名大医学部法医学講座 昭和区鶴舞65